

民博の国際協力 —博物館学国際研修の20年

文・写真 園田直子 そのだ なおこ

国立民族学博物館文化資源研究センター教授。保存科学専攻。予防保存にもとづいた博物館の総合的環境整備、資料の収蔵・保管方法の改良、資料保存のための開発研究、資料の材質や技法の調査などに取りくむ。また、博物館・博物館学における国際協力・人材育成に関心を持つ。編著書に、『紙と本の保存科学』（岩田書院 2009年、第2版 2010年）、『博物館への挑戦—何がどこまでできたのか』（日高真吾と共編 三好企画 2008年）などがある。

国立民族学博物館（民博）では、博物館を通じて各国の文化振興に貢献できる人材の育成を目的とした国際研修を、かたちを変えながら1993年より継続実施している。現在は、JICA（国際協力機構）から全面的委託を受けて、滋賀県立琵琶湖博物館と共同で「博物館学」コース（2012～2014年度）を企画、運営、実施している。博物館学の国際研修を始めてから20余年が経過した今、これまでの流れを整理し、今後の展開についてまとめる。

1993年度「博物館国際交流小セミナー」

1990年代初頭、民博には、アジア諸国から博物館関連の研修をしてほしいという要望が多く寄せられていた。1993年、ラオス、タイ、ミャンマーから博物館学を研究テーマとする外来研究員が同時期に民博に滞在したのを受けて開催したのが博物館国際交流小セミナーである。これが博物館学の国際研修の「ゼロ年」となった。7日間の小セミナーは、常設展示場・館内施設見学をはじめ、「映像・音響資料の製作、管理」「ビデオテープレコーダ（民博が発した映像音響情報のオンライン提供システム）」、「資料の収集から展示まで」、「ジャワ更紗展（当時開催していた特別展）」について、「博物館科学入門」、「HRAF—その分類システムと応用」、「民博におけるコンピュータ利用」、「民博と広報活動」、「日本各地の博物館の現状」と、当時の教職員の専門性を活かした内容で構成された。

小セミナー開催の立役者であり、当時、民博の教授であった森田恒之（現民博名誉教授）は、小セミナーの経験をとおして、このような企画を続ける上では、実行予算と事務的な支援体制の確保を解決すべき問題点と考えていた。

1994～2003年度「博物館学国際協力セミナー」

1994年度、JICA（当時、国際協力事業団）が、6ヶ月間の「博物館技術（収集、保存、展示）コース」の実施を決めた。そして民博では、そのうちの2週間を博物館学国際協力セミナーとして開催し、研修員を受け入れることになった。当初は2週間のセミナーとして始まったが、後に1週間の研修旅行の企画、実施が追加された。

博物館学国際協力セミナーの内容は、前年の小セミナーをベースに、民博の理念と実践について理解を促進すること、民博での研究や博物館活動の流れに沿うこと、民博に個別に依頼される研修希望とのリンケージをはかることを基本方針とした。セミナーには、JICAが募集した研修員に加え、民博の外来研究員や外国人研究者などもオブザーバーとして参加していた。民博のセミナーはそれ自体でひとつの独立したプログラムであり、セミナー修了生には、JICAとは別に、民博館長名での修了証書が授与された。

JICA研修員は毎年10名前後で、その年齢、経験年数、地位・職務は多岐にわたった。コースが10年の節目を迎える頃には、JICA研修員のなかからターゲットを絞った研修内容を望む声ができるようになっていた。

2004～2011年度「博物館学集中コース」

2004年度、コースは全面的に見直された。これには、JICAが国際協力事業団から独立行政法人国際協力機構となったこと、民博が大学共同利用機関法人人間文化研究機構の一機関になったという、制度上の変更も後押しとなっている。この時から、コースの企画、運営、指導は、JICAからの委託事業として、民博と滋賀県立琵琶湖博物館が共同で行うことになり、事務調整担当として民博の研究協力課国際協力係が携わることとなった。

コースの実施においてはこれまでも多くの国内の博物

「博物館学」コースの共通プログラムの講義と実習項目（2014年度）

項目	詳細	項目	詳細
(1) 博物館学総論	日本の博物館制度	(3) 展示	博物館の建築
	博物館と文化表象		常設展示 - 設計
	博物館と観光		常設展示 - ディスプレイ
	文化の展示の現在		特別展示 - 設計
	メディアと博物館		特別展示 - ディスプレイ
	文化行政と文化財保護政策		近隣の博物館の見学
	知的財産		モデル作成 - 目的と設計
(2) 収集・保存	資料整理と利用	(4) 社会連携	教育活動
	情報の利用とそのため施設		市民サービス、利用者交流
	データベース		評価（来館者調査）
	映像記録（取材から番組製作まで）		博物館とバリアフリー
	博物館における環境		歴史教育と博物館
	保存と修理1（民俗資料と歴史資料）	(5) 運営	人権と博物館
	保存と修復2（考古資料）		博物館の運営
	危機対策、災害対策		博物館とマーケティング
	保安、防災、防犯		売店経営、商品開発
	輸送と梱包		文化遺産と開発
映像資料の管理（マルチメディアを含む）	(6) 普及プログラム		

「博物館学」コースの個別研修プログラム（2014年度）

第1週目	予防保存 (民博)	地域歴史博物館の運営 (吹田市立博物館)	写真 (民博)
第2週目	資料の保存と修復 (元興寺文化財研究所)	博物館と地域コミュニティー (滋賀県立琵琶湖博物館)	民族誌映像の撮影と編集 (民博)
第3週目	考古資料の発掘と保存管理 (大阪府教育委員会)	展示デザイン (外部専門家)	記録とデータベース (民博)

館の協力を仰いでいたが、新コースを始めるにあたって、博物館と地域コミュニティとの関わりで先駆的な活動をしている滋賀県立琵琶湖博物館と連携することで、より充実した研修内容にしたいと意図したのである。

名称は JICA 集団研修博物館学集中コースとなり、期間は3カ月半の短期集中型となった。これまでは研修員に館長クラスから博物館勤務経験の浅い人までが混在し、トップマネジメントから博物館活動の実践面までの対応が求められていた。新コースは、実務レベルに焦点を当て、研修のターゲットを明確化した。

博物館学集中コースは、博物館活動全般に関する共通プログラムと、より専門的な個別研修プログラムから構成される。その大筋は、年ごとに微調整を加えながら、後のコースに受け継がれている。

博物館学集中コースが3年計画の事業としての更新を迎えた2009年度、JICAは、日本の国際協力事業全体を見直す動きのなかで研究成果の明確化を重視するように

なった。研修成果が現地で確実に還元されることを目指し、3年間、研修に参加する国を固定することを基本原則としたのである。一方、民博は、「大きな要望を持ちながらも博物館人材の少ない国を切り捨てる結果に陥らないこと」を強く要望した。その結果、研修に参加する国の固定化という JICA の考えは残しつつ、そのほかの国の研修員を受け入れる余地は残された。



講義のひとつ（2014年4月21日）。

2012～2014 年度「博物館学」コース

2012 年度から新たに 3 年計画で、博物館学コースが始まる。博物館学コースは前身の博物館学集中コースに較べると、各国の観光関連分野プログラムとの連携を強化し、内容的には博物館運営と危機管理の項目を充実させている。

博物館学コースの参加者は毎年 10 名前後、参加資格もこれまでの条件を踏襲している。すなわち、収集、ドキュメンテーション、保存、展示、教育など、博物館活動の実務経験 3 年以上で、各国政府の推薦を受けた人である。原則として、年齢は 25 歳以上 45 歳以下、大学卒業もしくは同等の学力を持つこと、そして研修内容を理解できるレベルの英語能力が求められる。

博物館学コースの最大の特徴は、これまでのコースもそうであったように、ひとつのテーマに特化するのではなく、博物館学に関する事項を総合的に扱うところにある。

コースは、全員が受講する共通プログラム（約 10 週間）と、より専門性の高い選択制の個別研修プログラム（3 週間）で構成される（3 頁表）。

共通プログラムには、博物館学総論、収集・保存、展示、社会連携、運営、これらの講義や実習のほか、各種のレポート発表や研修旅行が含まれる。コースは座学だけの一方通行ではなく、双方向の情報交換ができる「フォーラムの場」となることを意図している。そのため、研修員が、ミュージアムレポート、専門レポート、公開フォーラム、ファイナルレポートをとおして、自身の経験や考えを発表する機会



民博での博物館資料の梱包実習（2014 年 6 月 3 日）。

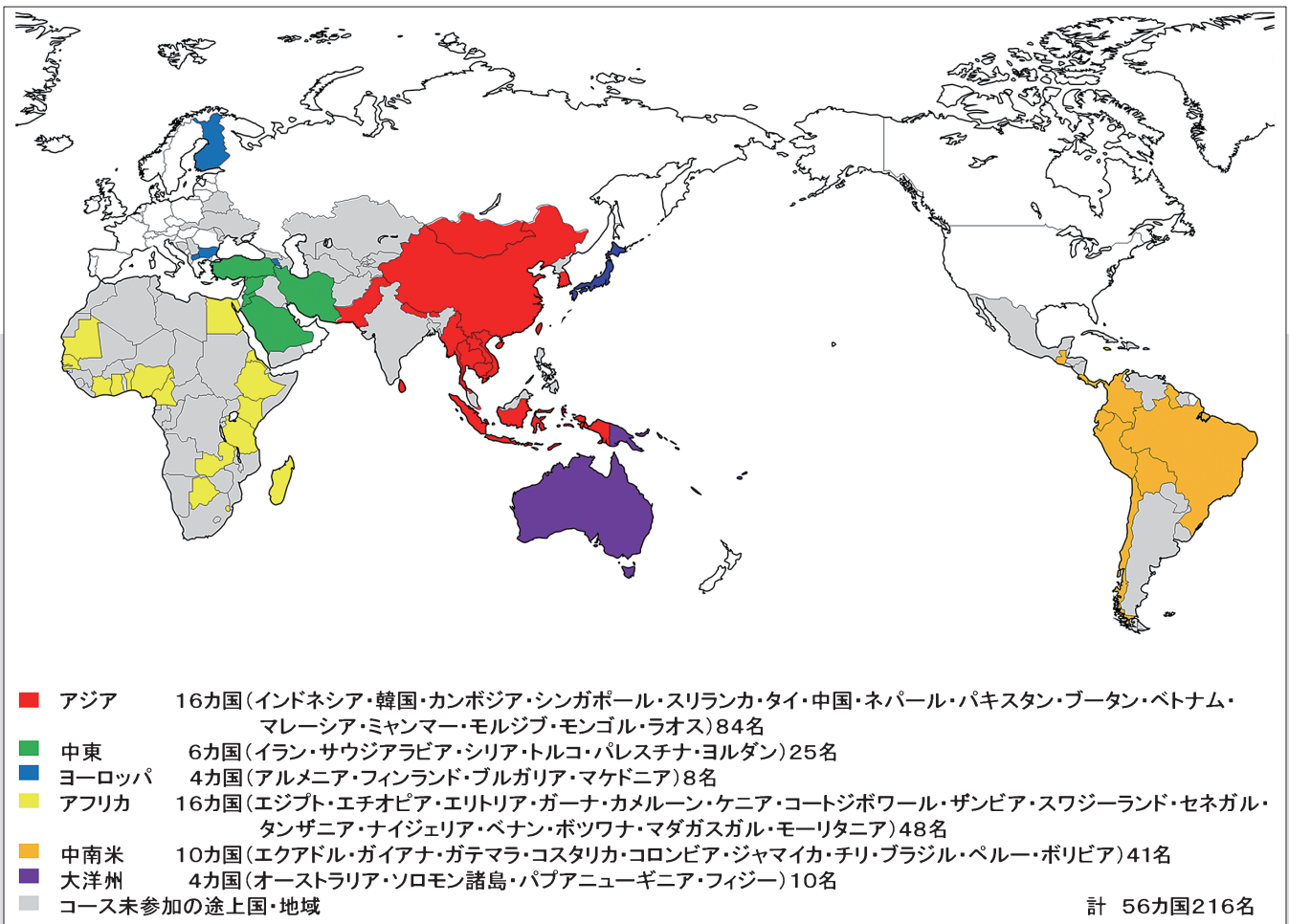
を設けている。ミュージアムレポートは、自国の博物館事情や自身の博物館の紹介であり、研修の初めに発表しあうことで、ほかの研修員や関係者と情報を共有する。専門レポートは、研修員の専門分野やそれぞれの博物館活動についての発表である。公開フォーラムは、世界の博物館事情を一般のびとに紹介し、交流をはかる場である。ファイナルレポートは、研修員それぞれが抱える課題に対する答えとして、自国に戻ってから実施可能なプログラム案を作成するものである。これは研修で得た知識を自国での博物館活動に反映させるという意味で、帰国後に研修員が行う事後活動の第一歩となる。

研修旅行としては、2014 年度は関西圏のほか、新潟、東京方面、広島博物館を訪れた。研修旅行では、日本の博物館の多様な実態を理解してもらうことを目指している。同時に、たとえば近つ飛鳥博物館では保存処理後の資料の展示とその展示環境、国立歴史民俗博物館では現代史展示が抱える問題など、それぞれに研修のねらいがある。講義や実習が休みのゴールデンウィークには、研修員はそれぞれの専門性に沿い、自分たちで選択した関西近郊の博物館を見学する。研修期間中、研修員は 40～50 近くの館を訪れることになる。

個別研修プログラムでは、週ごとに、3 つのテーマからひとつを選択する。2014 年度は、保存や写真撮影技術をはじめ、3 頁の表のようなプログラムが行われ、そこからの選択であった。

20 年間でみる変化

博物館学の国際研修の 20 年間で振り返ると、いくつかの変化を



博物館学国際研修に研修員またはオブザーバーとして参加した国と地域 (2014年7月現在)。

感じる。

当初は、収集・保存・ドキュメンテーション・展示など、博物館のいわゆる基礎的な技術・知識を深めたいという要求が強かった。10年が経過する頃から博物館教育を専門とする人、あるいは目指す人が急増する。近年は、社会や利用者との関わりを深めること、地域コミュニティとの連携を強めることへのニーズが高い。これは研修員個人の関心にもよるが、彼らの所属機関、あるいはその国が博物館に何を求めているかにも影響される。また、世界的な博物館の動向とも関連する。日本では、2011年12月20日の文部科学省告示第165号「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」の改正条文に、以下の2点が明記された。ひとつは博物館が学習機会を提供する目的として、利用者の調査研究に資することを追加したこと、ふたつめは学習機会の提供に係る業務として、利用者からの求めに応じ、博物館資料に係る説明または助言を行う業務を追加したことである。

この改正は博物館が利用者のニーズにいかに対応するか、

博物館が利用者の生涯学習の拠点としていかに対応し得るかを意識した措置といえる。途上国の博物館にはさらに、地域開発の中核となり、経済や文化の振興に寄与することへの期待も大きい。これらのニーズを受けて、現在検討を進めている来年度以降のコースにおいては、地域コミュニティとの連携というテーマを重視している。

日本の博物館は、欧米などに留学した先人たちが学んできたものを、日本の実状にあわせて取り入れ、改変して今にいたるところが多い。途上国の人びとが現在置かれている立場がまさにそうであるため、日本の博物館事情が参考になるというところから、博物館学の国際研修は始まった。戦後の日本の博物館の黎明期を経験した人びとが実施側に関わっているというのが、日本での研修の大きな強みであったが、経験のある人びともじょじょに現場から遠ざかっている。日本が一方向的に経験を伝えるという立場から、たがいに知見や経験を分かちあい影響しあうという関係にシフトしている。研修員の専門性は高くなっており、その経験や知識は研修を実施してい



民博での公開フォーラム「世界の博物館 2014」(2014年5月31日)。

る日本側にとっても有益である。専門レポートの発表の機会を設けたのも、このような背景からきている。2004年度の大規模なコース見直し以降、民博と琵琶湖博物館は、研修を3か月間の単なる研修で終わらせず、長期間の双方向型のワークショップ、シンポジウムたらしめることを強く意識している。

自国の博物館事情をもっとも理解している研修員自身が、日本で得た経験や知見を応用し変化していくことで、その国の実情にあった博物館運営や活動が生まれていくが、最近、研修員の意識に変化が見られる。JICAが帰国後の普及活動を重視していることが影響しているのか、具体的なかつ即時的なアウトプットを望む研修員が多い。目に見える効果がすぐにだせる、ということに関心が集中する傾向がある。

博物館としての民博の事例は、規模が大きすぎて参考になりにくいという声が研修員からでることもある。とはいえ、途上国の中には大規模な博物館建設が進んでいるところが増えてきた。2014年度の研修員のなかには、エジプト・ギザのピラミッドに隣接する大エジプト博物館や、ミャンマーの新首都ネピドーに建設中の国立博物館からの参加者がいた。一方、少人数のスタッフですべてに対応しなければならない、小さな博物館からの参加もあった。研修員はそれぞれの経験が異なるだけでなく、さまざまな博物館事情を抱えて日本に来ている。それぞれが置かれている立場は異なり、また業務で求められることも多様である。

博物館は、収集、保存、展示、教育、社会連携、広報などの活動が独立して動いているのではなく、すべて

が連携して成り立っている。だからこそ、博物館の規模に関わらず、博物館の活動全般を網羅する総合的研修が重要となる。博物館教育、あるいは保存修復など、ある特定のテーマに特化したコースならば、国内外

にはほかにも存在する。そのなかで民博が20余年続けている国際研修は、包括的な内容であるという点にその独自性があり、それがレゾン・デートルになっている。

国際協力・研修の新たな展開

これまで受け入れた研修員とオブザーバーをあわせて、56の国と地域からの216名にのぼる(5頁図)。毎年、その年の研修員が中心となってMinpaku Co-operation Newsletterを発行し、コースの近況を研修修了者に伝えている。また、SNSを通じた交流も盛んになってきた。

民博の研究者は、世界各地をフィールドにしている。そのため、民博は、他機関よりも継続的に研修修了者と連絡をとりあい、研修後のフォローがしやすい環境にある。一例をあげる。2005年、ザンビアのリビングストーンで「博物館学ワークショップ in Livingstone」が開催された。これには、日本から進行・調整役として、ザンビアをフィールドとする吉田憲司、園田直子(以上、民博)、川口幸也(当時民博)、亀井哲也(野外民族博物館リトルワールド)と五月女賢司(当時ロンドン大学大学院生)が参加した。このワークショップではザンビアのJICA研修修了者(当時6名)が自ら講師となり、自国の博物館関係者を対象にワークショップを開いたもので、日本での集団研修の成果が派遣国で結実したモデルケースとして高く評価された。結果、翌年度から3年間のJICA博物館学集中コース・フォローアップ研修がザンビアで実現した。2006年は展示デザイン(堀孝、外部専門家)、2007年は保存修復(日高真吾(民博)と藤田

孝（千里文化財団）、2008年はドキュメンテーション（久保正敏（民博））をテーマに日本から講師を派遣し、研修を実施した。

民博では、2012年度から3年計画で、日本学術振興会・研究拠点形成事業「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」を進めている。プロジェクトでは、アジア諸国で博物館学の教育研究を行い、博物館活動の中核を担う研究者や博物館の実務者とともに、それぞれの国の文化的・社会的背景に即した博物館・博物館学研究の創出と、自立的・持続的な博物館活動と人材育成の基盤形成を目指している。海外のコーディネーターは、1994年度（第1回目）JICA研修員であったタイのジャルニー・インチャーチャイ Jarunee Incherdchai 氏（現カンチャナビセーク国立博物館長）、同年度のオブザーバーであったモンゴルのイチンホルロー・ルハグワスレン Ichinkhorloo Lkhagvasuren 氏（現モンゴル科学技術大学教授）とミャンマーのヌームラザン Nu Mra Zan 氏（現ミャンマー文化省専門員・博物館顧問）である。2012年度はモンゴル、2013年度はミャンマー、2014年度はタイ、それぞれの国で専門家を対象とした共同研究会と、学生や一般の人びとを対象とした公開セミナーを開催し、各国の活発な博物館活動の事例を共有するとともに、それぞれの国の経験と知見を分かちあった。たとえばモンゴルでは、研修修了者たちが協力して国内セミナーを開催する活動を始めており、若い力が育っている。ミャンマーでは、若手の人材育成が喫緊の課題で、研修修了者たちがミャンマー国内の博物館学コース（Museology Diploma Course）で教えている。タイでは、収蔵展示に特化した博物館、寺院や地域コミュニティに根ざした博物館など、さまざまな博物館のかたちが実践されており、博物館の発展期に入っている。各国における博物館学の発展段階やニーズが異なるなか、



新潟研修旅行。長岡震災アーカイブセンターきおくみらいでの研修の様子。（2014年6月7日）。

それぞれの国において現在置かれている状況に合わせた展開が見られる。そして、その中核にかつての研修修了者やオブザーバーがいる。民博の20年間の国際協力・研修の成果は結実しつつある。

2015年2月、民博において国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」を開催する。このシンポジウムは、上記プロジェクトの成果発表であるとともに、民博の20年あまりの博物館学における国際貢献、人材育成の集大成のひとつと位置づけることができる。シンポジウムでは、アジアの歴史的・社会的・文化的背景に即して発展し成熟する各国の博物館研究と、その実践事例を共有し、アジア独自の博物館・博物館学のありかたを議論する。民博がこれまで築いてきた博物館学のネットワークを継承しつつ、今後へとつながる、持続的な国際協力体制の構築をめざすものである。これまでの研修実施側と研修を受ける側という図式を超え、新たに博物館を軸とした国際協力、開発協力の体制が構築できると期待される。

【参考文献】

- 田村克己 1998 「世界の博物館と民博をむすぶ―「博物館学国際協力セミナー」報告」『民博通信』82：137-158。
森田恒之 1994 「「博物館国際交流小セミナー」のこと」『民博通信』64：59-63。
1999 「JICAの博物館コースとわたし」『民博通信』84：117-125。